

今こそ読む この1冊

潮木守一

桜美林大学大学院招聘教授

市川昭午著

『教育政策研究五十年——体験的研究入門』

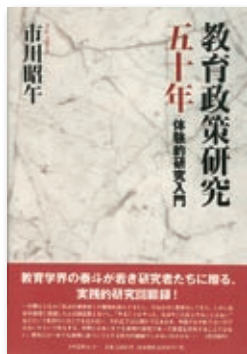
(2010年 日本図書センター)

照準点とされ続ける 50 年間

教育政策に限らず、外交政策、労働政策、福祉政策、すべての政策には絶対解はない。いかなる政策といえども、ある人々にとっては歓迎すべきことだろうが、そうでない人が必ずいる。ある種の人はそれで満足するだろうが、別の人々にとっては不満であろう。前後左右様々な論説が入り乱れる空間のなかで、政策研究はどういう役割を果たすべきなのだろうか。本書で市川昭午氏は、50年間の教育政策研究を回顧している。

回顧といっても追想録ではない。その時点その時点で起こった教育政策上の論点はどこにあったのか、それに対して市川氏はどのような立場をとったのか、その論拠は何だったのかを説いている。この50年間の論争を改めて読み直してみると、市川昭午氏はたえず異論を唱え、異説を説いてきたことがわかる。耳触りのよい正論、硬直した教条主義に対しては、条理を尽くしてそれぞれの主張に含まれる落とし穴をえぐりだしてきた。とかく議論が白熱すると、自説に固執するあまり、自説に潜んでいる落とし穴が目がいなくなる。あるいはあえて目をつぶりたくなることもある。世間一般の通説に逆らえば、周囲の人から煙たがれることもある。こういう時でも市川氏は人々が目を背けようとする論点に光を当ててきた。だから教育基本法改正を審議する中央教育審議会でも、ただ一人改正に反対の立場をとった。審議会委員のなかには、市川氏の主張を耳の痛い思いで聞いた委員もいたことだろう。

だからこれまでも幾度か「市川転向説」が浮上した。つまり市川氏は変節したというのである。ある時期には市川氏の交友関係が良くないと疑った人々がいたらしい。その当時名古屋に住んでいた筆者のもとに、遠路はるばる事情聴取だか査問だか知らないが、様子を探りに



きた人物がいる。その人物のまなこからは、最後まで疑惑の光が消えなかった。

同様な経験は最近もまたあった。市川氏をあれだけ排除しようとしたグループを、今度は市川氏が支援しているようだが、あれはどうしてだろうかと、首を傾げていた。しかし筆者の見限り、市川氏のスタンスは常に一定で、むしろ世間のほうが「転向」したのだ。だから市川説は右からも左からも常に

意識されてきた。少なくとも何時の時点においても、いかなる立場からも照準点とされてきた。

言説の背後まで語り描くことが政策研究

イデオロギー対立という固定図式に依存し、それに寄生する時代はもはや消滅した。大きな物語が融解すればするほど、イデオロギーに代わって登場するのは、耳触りのいい言説である。そういう言説の背後に潜んでいる落とし穴を描き切る作業こそが、政策研究に求められることになる。

一頃まで自分たちとは異なった説を立てる者に対しては、寄ってたかって仲間を募り、嫌がらせをし、罵声を浴びせ、あるいは冷笑、無視を重ねる時代があった。こうした時代状況のなかを、スタンスを変えずに生きることは、容易なことではない。ついには対立者までが「敵ながら天晴れ」とつぶやいたというエピソードがある。そういう人たちも今ではおおかた故人となってしまった。しかしそれらはすべて過去の霧のなかに消え去ったのだろうか。あれは特殊な時代だったという解説をする人がいるが、それでは特殊とは何か。舞台上に登場する役者は入れ替わっても、人間の内心は変わらない。人間は友愛にあふれてもいるが、いくらでも残酷になる。著者の一見さりげない記述のなかに、人間ドラマが見え隠れする。それが「体験的研究入門」の意味なのだろう。研究は世離れた作業ではない。これほど生々しい作業はない。